

徳川家康と武田信玄・勝頼

—高天神城をめぐる抗争史—

健康科学大学特任教授
NHK大河ドラマ「どうする家康」時代考証
平山 優

1, 高天神城をめぐる徳川と武田（永禄11年12月～同12年1月）

- ・ 永禄11年12月、武田信玄・徳川家康は、今川領国に侵攻開始
 - 家康は遠江を順調に制圧
- ・ 武田重臣秋山虎繁勢が、信濃国伊那より遠江に侵入し、見付方面へ進軍
 - 遠江では、武田か徳川かで去就に迷う武士がいた
- ・ 『三河物語』によると、馬伏塚城・高天神城の小笠原与八郎氏助が、武田に従属すべく、人質を伴って見付に参上しようとしたとある
 - 氏助は途中、家康の命を受け、彼を説得に向かっていた一族小笠原新九郎安元（三河国幡豆小笠原氏）らと出会い、説得され、徳川への従属を決意したという
- ・ 馬伏塚城主小笠原氏興、高天神城主小笠原氏助の徳川帰属は、永禄11年12月21日（『科註拾塵抄』）
 - 馬伏塚・高天神小笠原氏の徳川従属により、遠江衆の多くは家康に従う選択を始めたといわれる
- ・ 秋山勢と徳川勢が、見付付近で交戦、家康は信玄に抗議
 - 信玄、秋山勢を駿河に撤収させる
 - 家康、遠江平定を実現
- ・ 武田氏は、高天神城の確保に失敗

2, 武田信玄の西上と高天神城（元亀3年10月～同4年4月）

- ・ 元亀3年10月10日、武田信玄本隊は、駿河から大井川を渡河し、遠江に侵入
 - 武田氏が発給した禁制などから、武田軍本隊は、塩買坂を越えて高天神城へ
- ・ 10月21日までには、高天神城主小笠原氏助が降伏
 - 不違兼日之首尾、各忠節誠感入存候、於向後者、追日可令入魂存分候、弥戦功専要候、当城主小笠原悃望候間、明日国中へ進陣、五日之内越天竜川向浜松出馬、可散三ヶ年之鬱憤候、猶山県三郎兵衛尉可申候、恐々謹言
 - 十月廿一日 信玄（花押）
道紋
- ・ 10月22日、信玄本隊、見付に向かう、袋井から別働隊を久野城、向笠城、天方城方面へ派遣
- ・ 信玄は、武田海賊衆（水軍）を、三河湾に派遣
 - 武田水軍は、田原を放火、遠州灘の制海権を握り、三河湾封鎖を目指す
 - 高天神城攻略の意味は、城下の「菊川入江」と「浜野浦」の確保というもう一つ

の目的があった可能性が高い
→土屋比都司氏によって明らかにされた「海の城」としての高天神城の役割

3, 徳川家康の反攻と高天神城奪回（元龜4年4月～5月）

- ・元龜4年4月12日、信玄死去
 - 家康、遠江の諸城奪還へ動く
 - 磐田原台地を始めとする浜松―懸川間の武田方城砦を次々に奪回
 - この時、高天神城主小笠原氏助も徳川に再帰属したと推定される

4, 武田勝頼の高天神城奪還（天正2年6月）

- ・天正2年5月4日、武田勝頼、遠江に侵入、塩買坂を経て12日に高天神城を包囲
- ・小笠原氏助、家臣匂坂牛之助勝重を城から脱出させ、徳川家康のもとへ援軍要請
 - 家康は、5月22日付で知行100貫文を牛之助に与える判物を出す
 - 牛之助は、25日に高天神城に帰還し、援軍派遣は約束されたことを報告するも、援軍が到着しないため、面目を失う
 - 牛之助は、6月初旬ごろ浜松に再度向かい、織田勢を確認して城に戻るが、誰も信用しなかったといわれる（『三河物語』他）
- ・5月23日、この頃までに城主小笠原氏助、武田氏と開城交渉を始める
 - 勝頼、氏助宛の起請文（所領安堵、新恩充行等の約束）を穴山信君を通じて手交す
 - 交渉不調に終わる、勝頼激怒（氏助、交渉を長引かせる意図ありか）
- ・5月28日、勝頼、真田信綱（推定）に書状を出す
 - 武田軍は本曲輪、二の曲輪、三の曲輪の堀際にまで攻め寄せており、落城までは十日ほどと見積もる、氏助が色々と懇願しているが、決して許さぬ
 - 勝頼の強硬な姿勢は、6月11日になっても変化なし
- ・6月11日、勝頼は信濃国衆大井高政に書状を出す
 - 5月12日から攻撃を開始し、6月10日には「塔尾」（堂の尾曲輪）を占領、城は本曲輪の二の曲輪を残すのみ、三日以内に城は攻略できると述べる
- ・城内では、開城派と抗戦派に分裂し、紛争が始まったという
 - 本曲輪の氏助は武田に降ろうと考え、二の曲輪に在城していた一族小笠原義頼は徳川方に留めるべきと考える
 - 城内での内戦に発展、本曲輪と二の曲輪で矢玉が飛び交う事態となった
 - 義頼方は城から追放され、氏助は城内の意思を降伏、開城で一本化
- ・6月17日、氏助、武田氏に降伏
 - 織田信長の援軍、同日、三河吉田城に到着
 - 19日今切の渡にまで到達するも、ここで信長と家康は高天神城落城を知り、吉田に引き返す
- ・勝頼、小笠原氏助をそのまま城に在城させ、穴山信君を配備
 - 氏助は、勝頼から「弾正少弼」の官途と、偏諱を与えられ「信興」と名乗り、「高天神」の朱印を用いて城東郡の統治を開始

- しかし勝頼は、高天神小笠原氏の属城である馬伏塚城を、同時に接收せず
- ・8月、家康は、馬伏塚城を接收して、大改修を実施、城将として大須賀康高を配置
- ・馬伏塚城（徳川方）と高天神城（武田方）で対峙する構図の成立

5、高天神城攻防戦（天正3年5月～天正7年8月）

- ・天正3年5月21日、長篠合戦（武田勝頼大敗）
 - 三河・遠江の武田方城砦が相次いで家康により攻略される
 - 8月24日、諏訪原城失陥
 - 12月24日、二俣城失陥
 - 二俣城将依田信蕃は、本領に戻らず、高天神城に入り徳川方と戦う姿勢を見せる
- ・天正3年10月23日、小笠原信興、山梨上郷（袋井市）における高天神衆の乱暴狼藉を禁じる文書を発給（これが信興による高天神領支配最後の文書）
 - 天正3年末ごろ、小笠原信興は駿河国富士郡に移封（戦国大名による移封の事例として知られる）
- ・高天神城は、武田氏直轄の城郭となり、遠江における対徳川戦の最前線となる
 - その後、遠江における徳川・武田の戦線は膠着
- ・天正6年3月9日、越後上杉謙信急死→御館の乱勃発、勝頼は越後に出兵
- ・7月3日、家康、横須賀城の普請を開始、15日に完成（『家忠日記』）
 - 馬伏塚城に代わる高天神城攻めのための新たな拠点の成立、高天神城から馬伏塚城、袋井方面に抜ける浜道は完全に封鎖された
- ・10月、勝頼は駿河に出陣し、遠江小山城、相良を経て浜道を横須賀城方面に進出
 - 家康もただちに横須賀城に入り、武田軍に備える
- ・11月2日、武田軍は横須賀城に接近するも攻撃せず
 - 勝頼は、高天神城への補給を行うと、12月25日には帰国の途につく
- ・天正7年3月、勝頼、北条氏との同盟破棄を決意
 - 勝頼、信濃海津城代春日信達（高坂弾正〈春日虎綱〉の子）を駿河沼津に配置転換、信濃衆の多くが駿河に配置される
- ・8月、勝頼、高天神城の大幅な番替えと補給を実施
 - 岡部元信、相木常林、江馬右馬丞（飛騨衆）、横田尹松（武田重臣）らを配備（『甲陽軍鑑』による）
- ・9月、甲相同盟破綻、武田・北条は戦闘を開始
- ・9月5日、徳川家康と北条氏政は同盟を締結（相遠同盟）
 - 家康の仲介で、天正8年3月、織田信長と北条氏政の同盟成立
 - これ以後、徳川・北条の共同作戦により勝頼は駿豆国境に拘束され、遠江への援軍や補給が困難となる
- ・11月26日、勝頼、高天神城に入城し兵糧、武器などの補給を実施
 - これが、遠江と高天神城に補給を実施した、武田勝頼最後の軍事行動となった

6、高天神城陥落と廃城（天正7年8月～天正9年3月22日）

- ・天正7年11月、家康、横須賀城の拡張工事を実施、大坂山を占領し三井山砦を築く（『三河物語』他）
 - 高天神城への付城は、小笠山砦に続いて二つ目
 - その後徳川方は、付城を徐々に増やし、俗に「高天神六砦」と呼ばれる付城網の構築に成功

（徳川軍による高天神城包囲網）

- ・山王山砦……徳川家康本陣
- ・小笠山砦（六砦の一つ）……石川家成、織田援軍（水野忠重、大野・緒川・刈谷衆ら）
- ・能ヶ坂砦（六砦の一つ）……本多広孝・康重父子
- ・畑ヶ谷東砦（天王馬場の陣場）……本多忠勝
- ・三井山砦（大坂砦、六砦の一つ）……酒井重忠（西尾城主）、深溝松平家忠ら
- ・火ヶ峰砦、鹿ヶ鼻砦、中村砦（六砦の一つ）、安威砦……大須賀康高
- ・林ノ谷砦、矢本山砦、萩原口砦……大久保忠世

（高天神城包囲網の強化）

- ・天正8年8月より、徳川軍は高天神城包囲を強化
 - 城の四方に深く広い空堀を掘り、高い土塁を築き、高い板塀を並べ、塀に付虎落を結ばせる
 - 堀の城側に向けて七重、八重の柵を設け、一間につき侍一人ずつ番を配置
 - 武田軍の襲来に備え、駿河方面にも広く深く大きな堀を巡らせる
 - 『三河物語』が「城中よりハ鳥も通わぬ計なり」と記すほど
- ・高天神城への補給は完全に途絶
 - 滝境城からの小荷駄は、徳川方の「かまり」（忍び）により拿捕される
 - 武田水軍による「菊川入江」からの補給も撃退される（天正8年8月2日、『家忠日記』の同7日条による）
- ・天正8年秋（『甲陽軍鑑』は天正7年秋とするが、誤記であろう）、高天神城籠城衆が連判した嘆願書を勝頼に送る
 - 援軍と兵員の入れ替えを要請、横田尹松のみが反対し、城を見捨てるよう進言
- ・天正9年1月、城将岡部元信、高天神衆勾坂甚太夫と暮松三右衛門尉に使者に任じ、徳川の包囲網を突破し、勝頼に援軍の要請を実施
 - 彼らは、何度か城と甲府を往復し、援軍要請を行う
 - 天正9年1月17日、勝頼は、岡部の奮戦を賞し、知行を与える証文を与える
- ・当時勝頼は、織田信長との和睦交渉を実施していた（「甲江和与」「甲濃和親」）
 - 勝頼は、まず信長と和睦し、さらに家康とも和睦することで、高天神城の籠城衆を救おうとしたと推定
- ・天正9年1月20日頃、高天神城籠城衆、徳川の陣所に矢文を放ち、降伏開城を打診
 - 降伏を認めてくれれば、高天神城の他に、滝堺城、小山城をも明け渡すとしていた
 - 織田信長は、降伏拒絶を家康に勧告、家康、これに従い降伏を認めず
- ・3月22日、高天神城落城
 - 高天神城籠城衆は、兵糧も尽き、餓死者が続出していたため、夜10時頃、城から討って出て、徳川軍の陣地を攻撃

→城将岡部元信、駿河衆三浦右近、孕石元泰、朝比奈弥六郎、由井忠次、信濃国衆当主栗田鶴寿、依田（相木）美濃守立慶、上野国衆当主大戸浦野弾正忠、飛騨国衆江馬右馬丞、武田重臣安西平左衛門、遠江衆神尾但馬守、武藤刑部丞ら688人が戦死（『信長公記』『家忠日記』他）。

- ・ 武田氏に忠節を尽くし、「三ヶ年の籠城」を耐え忍んで奮闘した、高天神籠城衆を救う努力をしなかったとみなされた**武田勝頼**は、「**天下の面目を失った**」（『信長公記』）

→高天神落城後、信長は成就目前との噂が関東に流れた武田との和睦交渉を打ち切る

- ・ **高天神城落城は、「高天神崩れ」と呼ばれ**、甲斐・信濃・駿河・遠江・上野・飛騨など、武田領国の全域から招集された国衆、土豪らで籠城衆を見捨てたとみなされた**勝頼**は、**戦国大名の当主としての求心力を完全に失う**

→高天神城は、落城を最後に歴史の表舞台から姿を消す（廃城か）

- ・ 天正10年1月、信濃木曾義昌謀叛→武田領国の諸城は抵抗せず、ほぼ自落、開城

→3月11日、**武田氏滅亡**